

台灣漢民族の死靈と土地

——謝土儀礼と地基主をめぐつて——

植野弘子

- 一 序——死靈と土地
- 二 漢民族の超自然的世界
- 三 「鬼」の世界
- 四 謝土と地基主
- 五 「鬼」的神と領域の神
- 六 結び——死靈と「地」

論文要旨

本稿は、台灣漢民族における死靈と土地の超自然的存在との関連についての一試論である。漢民族においては、祖靈と死靈は明確に区別されている。死靈——「鬼」は、子孫をもたず、あるいはこの世に恨みを残して死んだものであり、冥界で不幸な境遇にあるとされる。こうした「鬼」はこの世にさまざまに出で人々に不幸を振りまくことになる。しかし、「鬼」は可変的性格をもち、祖先にも神にも変化する存在である。これまでの研究においては、「鬼」は靈的世界のアウトサイダーであり、「鬼」を無体系なものとみなしききた。しかし、「鬼」はけつして混沌たる世界を漂漾しているのではない。人と「鬼」との交信には「鬼」を統轄する神々が登場する。この神々は陰陽両界に関わるとともに「地」に関わる神であり、「鬼」が昇化して神になつ

たものもいる。落成儀礼へ謝土へにおいて、人は建造物を建てた土地から悪いものを払い、その土地を「陰」の世界の土地の持ち主へ地基主へから買取らねばならない。△地基主△とは、かつての土地の持ち主で死後その靈がその土地に残ったものとされている。つまり「鬼」であり、「鬼」が土地の主となるのである。土地は「陰」から「陽」の世界のものとなって初めて人が住むにふさわしいものとなる。土地は陰陽の両界をつなぐ場である。人と死靈は「地」に関わる超自然的存在によつて媒介され、人はその住む地によって冥界と切り放せない現世を知るのである。漢民族は冥界をこの世と同様にリアルに描いている。そして、冥界と地とを結び付けることによって、また「鬼」という浮遊性をもつ超自然的存在に一定の秩序を与えることによって、人が他界を生活の中に感じ、また解釈を与えているのである。